

Title	『千のプラトー』における抽象機械の理論について : イェルムスレウの言語素論における言語図式に着目した考察
Author(s)	平田, 公威
Citation	共生学ジャーナル. 2019, 3, p. 1-25
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/72882">https://doi.org/10.18910/72882</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 『千のプラトー』における抽象機械の理論について —イェルムスレウの言語素論における言語図式に着目した考察—

平田 公威\*

### About the Theory of Abstract Machine in *A Thousand Plateaus* A Study Focusing on Linguistic Schema in Hjelmslev's Glossematics

Kimitake HIRATA

#### 論文要旨

ドゥルーズ＝ガタリは、『千のプラトー』において、抽象機械概念とともに哲学体系を構築している。抽象機械は、あらゆる現象と生成変化の条件として機能するのだが、他の概念との複雑な関係や他の学問領域の概念を前提とした圧縮度の高い記述のために、十分に説明されていない。本稿では、ドゥルーズ＝ガタリの着想源である言語素論の概念、とくに言語図式を参照することで、抽象機械にかんする理論の解明を試みる。この作業は、『千のプラトー』の体系的な読解に寄与するだけでなく、メジャー言語のマイナー言語への生成変化というドゥルーズ＝ガタリのプラグマティックにも迫るものである。

**キーワード** ドゥルーズ＝ガタリ、『千のプラトー』、抽象機械、イェルムスレウ、言語素論

#### Abstract

Deleuze and Guattari, in *A Thousand Plateaus*, constitute their philosophical system with the concept of abstract machine, which functions as the condition of all types of phenomena (stratification) and becoming (destratification). Nevertheless, this concept is not well explicated because of the complicated relationships with other concepts in *A Thousand Plateaus*, and the text high compressed implying other disciplines. This article essays to clarify the theory of abstract machine, referring concepts of Hjelmslev's Glossematics, especially the linguistic schema, which provide Deleuze and Guattari with inspiration. This attempt does not contribute only to the systematic reading of *A Thousand Plateaus*, but also the approach to Deleuze and Guattari's pragmatic, the becoming-minor of the major language.

**Keywords:** Deleuze and Guattari, *A Thousand Plateaus*, abstract machine, Hjelmslev, glossematics

---

\*大阪大学大学院 人間科学研究科 共生の人間学 博士後期課程 ; hirata.kim@gmail.com

## はじめに

ジル・ドゥルーズ (1925-1995) とフェリックス・ガタリ (1930-1992) は、『千のプラトー』において、さまざまな概念とともに新しい思考を展開している。たとえば「リゾーム」や「リトルネロ」は、ドゥルーズ＝ガタリの創造性を示す有名な概念であるが、彼らの思考の革新性は「地層」(strates) という基本概念にすでに表れている。地層は、現働的な領野を記述する概念であるが、相互に異質な「表現」(expression) と「内容」(contenu) からなり、「著しい可動性」(grande mobilité) をもつとされる (Deleuze et Guattari 1980: 627-628/下 302)。かつてのドゥルーズは、「同一性」(identité) の桎梏により差異を捉えるとして「表象＝再現前化」(représenation) を厳しく批判していたが、これに取って代わる地層は、全く新しい仕方でも現働的な領野を描いている。つまり地層においては、同一性とは全く異なる論理がはたらいているのであり、『千のプラトー』の哲学体系の新しさが包含されているのである<sup>(1)</sup>。そして、この論理と体系の核心をなすのが、地層に統一性を与えつつも可動性を保証し、ときには脱地層化の運動をももたらす原理、すなわち「抽象機械」(machine abstraite) である<sup>(2)</sup>。

本稿では、抽象機械にかんする理論の解明を試みる。この概念は、他の概念との複雑な関係や他の学問領域を前提とした圧縮度の高い議論のもとで練り上げられているため、本稿ではその着想源と考えられる言語理論を参照する。具体的には、デンマークの言語学者ルイ・イェルムスレウ (1899-1965) が提唱した「言語素論」(glossématique) の「言語図式」(schéma linguistique) 概念に着目し、その延長線上に抽象機械を位置づける<sup>(3)</sup>。いわば、言語素論の徹底として『千のプラトー』を再構成する解釈を提示する。

以下では、まず言語素論を概略し、そのうえで抽象機械にかんする『千のプラトー』の記述を読解する。こうした戦略上、本稿では『千のプラトー』の言語論的な側面に焦点をあて、奇妙な英語表現/he danced his did/や、多言語併用がもたらす英語への変化について考察する<sup>(4)</sup>。そのため、本稿が収める視界は多少なりとも制限的である。しかし、以下で示すように、徹底化された言語素論は、必然的に非言語的なものを巻き込んでいくため、『千のプラトー』の一貫性とその広がり、かえってよく示されるであろう。

## 1. イェルムスレウの言語素論

### 1-1. 言語素論の分析手続きについて

イェルムスレウは、ソシュールを嚆矢とする構造主義言語学の系譜に名を連ねる言語学者である。その代表的な著作である『言語理論序説』では、独自の言語分析の方法論が提示されているのだが、その方法論で目指されているのは、言語外の現実に依拠しない独立した科学としての言語学の確立であり、いわば、厳密な科学としての言語学の基礎づけである。この試みのために、イェルムスレウは、言語的データに内在的で「無矛盾的で悉尽的な」(non contradictoire et exhaustive) 分析を可能にする手続きを、公理体系というかたちで提示しているのである。

『言語理論序説』でイェルムスレウが提示するのは、分析対象となる「テキストを類とみなして、これを区分単位に分割し、これらの区分単位を類とみなして、これをその区分単位に分割し、このような具合に分割をさらに続けて、これ以上はもはや分割できないところまでこれを続けていくという分析である」(Hjelmslev 1968:21/13)。その際、分析に求められるのは、対象を部分に分けるのではなく、部分同士の「関係」(rapport) を説明することである。つまり、「イェルムスレウ派にとって、言語とはなによりもまず結合関係であり、言語学者の目的は結合規則を発見することなのである」(Ducrot 1968:69/65)。

言語素論では、この関係は「機能」(fonction) と呼ばれ、機能に入る項は「機能素」(functive) と呼ばれる。そして機能素は、次のように「恒常素」(constante) と「可変素」(variable) の二つに分けられる。

恒常素とは、その機能素の現前が、それと機能をもつ機能素の現前にとって必要条件であるところの機能素と理解したい。反対に、可変素とは、その機能素の現前が、それと機能をもつ機能素の現前にとって必要条件でないところの機能素と理解したい。(Hjelmslev 1968:51/43)

これら二種類の機能素は、テキストにおいてさまざまな関係を取り結び、そこから言語学的カテゴリーが定義される。フランス語の文法を例に確認しよう。たとえば、限定辞(冠詞、指示詞、所有詞)と名詞のあいだの機能

は、両者が恒常素となる相互依存関係である。つまり、いわゆる文に現れるためには、両者がともに現れなければならない。また、形容詞と名詞の機能は、前者が可変素であり後者が恒常素となる一方依存関係である。言い換えれば、名詞がなければ形容詞は文に現れることができないが、名詞は、形容詞がなくても現れうる。こうした分析により、名詞が文に現れるためには、限定辞が必要条件ではあるが、形容詞はそうではないという文法規則が明らかになり、名詞というカテゴリーが定義される（同様に、形容詞は名詞と限定辞を必要条件とする）<sup>(5)</sup>。

こうした分析の特徴は、テキストに対して超越的な視点や言語外的な要素をもち込まないことにある。つまり、テキストに現れる要素の比較を通じて、その関係だけが内在的に記述されるのである。その分析の結果、言語学的なカテゴリーが得られるのだが、これは、ある言語的要素が他の要素に対してもつ関係の束ということになる。こうした分析手法は、テキストに対して完全に内在的であり、イェルムスレウの見立てでは、それのみが、言語外の現実に依拠しない独立した科学に相応しいのである。

## 1-2. 言語記号と言語図式について

このように、言語素論の目的は、テキストに現れる要素がもつ関係の記述にある。そこで先のような分析の方法が提示されるのだが、この分析は、言語記号以外の記号にも適用可能な射程をもっている。しかしながら、言語素論が言語の科学として構築されている以上、それに固有の対象をもたなければならない。そのためイェルムスレウは、言語学が分析対象とすべき「言語記号」(*sémiotique*)を、相互排他的に区別される表現面と内容面の連帯関係（両方が恒常素となる相互依存関係）からなる記号と定義している<sup>(6)</sup>。すなわち、一方の面が現前するときには必ず他方の面が現前し、なおかつ、それぞれの面が独自の体系をもつような記号こそが、言語素論に固有の分析対象となるのである。なお、ここで注意されたいのだが、表現面と内容面が見いだされるとき、その排他的な区別だけが重要であるため、どちらを何と呼んでも構わない。つまり、伝統的にシニフィアンと呼ばれる面を表現面とし、シニフィエと呼ばれる面を内容面とする必然性は全くないのである。

こうした言語素論の分析にとっての最終的な目的は、これら表現面と内容面の分析を通じた「言語図式」の記述にある。この概念は、ソシュールの

「ラング」を徹底的に抽象化することで鋳直したものであり、「言語構造」(structure linguistique)とも呼ばれる。つまり言語素論では、実際的な「言語使用」(usage linguistique)の分析を通じて、それらの要素に共通する「形式」(forme)、つまり「恒常性」(constance)の抽出が目指されるのである<sup>(7)</sup>。

もっぱら形式だけを前提とする体系を通して、言語に特定の構造に到達しようとする理論は、パロールの流動と変化を絶えず考慮しながらも、これらに優越的な役割を与えることなく、言語外の「現実」には根を下ろさない恒常性を必然的に追求しなければならない。(Hjelmslev 1968:15/7)

それでは、ここで恒常性とと言われる言語図式とは何か。言語図式とは、いわばフランス語などの言語の形式のことであるが、言語素論的には、それは記号の体系ではない。つまり、辞書に記載されているような単語(書記的表現面と観念的内容面からなる「記号形式」)の体系ではない。というのも、言語記号が非記号的な要素からなるため、言語図式もまた、言語的ではあるが非記号的な要素の体系(「範列構造」)ということになるからである。

記号の構成部分として記号体系の中に入るこのような非記号を、われわれはここで記号素 [figures] と呼ぶことにしよう。これはたんに、便宜上の理由で導入される操作上の名称である。[……] 言語の目的と考えられるところによれば、言語はまずなによりも記号体系である。しかし言語の内的構造からすれば、言語はまずなによりもこれとは別のもの、すなわち、記号の形成に用いられることのできる記号素の諸体系である。(Hjelmslev 1968:64/57)

たとえば、「bœuf」というフランス語の言語記号は、/bœuf/という書記的表現面と、〈牡牛〉という観念的内容面に分割できるが、そこからさらに分析を進めることができる。すなわち/b/や/œ/などの書記素に分割できる。この分析により得られる要素は、もはやそれに連関する内容面をもたず、独自の体系をなしている(/b/などの書記素は、それに対応する内容面をもたず、他の面の要素に還元されない体系に属する)。言語素論では、このような記号を形成する非記号的な要素は「記号素」と呼ばれる。この分析手続き自体はアンドレ・マルチネの二重分節理論に由来するのだが、イエ

ルムスレウは、これを表現面だけでなく内容面にも適用するため、言語図式は、表現面と内容面のそれぞれの記号素の体系からなることになる。

ここで重要なのは、言語素論で記述される記号素が、実定的な質ではなく、他の要素との関係によってのみ定義されるということである。たとえば音韻論な記号素／b／という形式は、実際の発音（「実質」(substance)）には還元されず、有声性といった物理的な特徴にも還元されない。／b／という形式は、さまざまな発音により「実現されうるもの」(un réalisable)ではあるが、「実現されたもの」(un réalisé)ではない<sup>(8)</sup>。形式は、ただ別の要素から区別されるということによってのみ定義されるため、それがどのような仕方でも実現されようとも構わないのである。したがって、極端に言えば、辞書に載っている語をすべて別の語と入れ替えても、それがもとの要素間の関係に対応しているのであれば、同じ言語として認められるのである(Hjelmslev 1966:64/56)。そして、このような要素からなる体系としての言語図式もまた、「実現されうるもの」ということになる。

以上の議論をまとめよう。言語素論では、そこで得られる要素間の関係を記述するという、テキストに内在した分析が行われ、このときの関係は、恒常素と可変素の組み合わせにより説明される。そしてこの分析により、表現面と内容面の両方を考慮に入れなければならないような、二つ以上——ということについては後述するが——の異なる要素体系からなる言語の図式が得られるのである。

## 2. 『千のプラトー』の言語素論受容と抽象機械の練り上げ

### 2-1. 表現と内容の受容について

それでは、『千のプラトー』では、どのように言語素論が受容されているのであろうか。「はじめに」で述べた通り、「表現」と「内容」の対概念や「地層」、さらに「アレンジメント」といった主要な概念は、第三プラトー「道徳の地質学」でみられるように、言語素論の言語記号概念を、非言語論的な射程にまで拡張することで練り上げられている。この独創的な解釈は、イェルムスレウの意に反する試みかもしれないが、たしかに言語素論の用語法で説明可能である。つまりドゥルーズ＝ガタリは、「[……] まさに、権利上

は言語素論のものである哲学と認識論の地平上でイエルムスレウの理論を捉え直している」だけでなく、「[……] イエルムスレウの成果がそこで前進させられている [……]」のである (Badir 2004:22-23/13)。

また、イエルムスレウは、非記号的ではあるが言語的な要素として記号素を提示していたが、これは、シニフィアン中心主義への批判も可能にしている。本稿では考察を深めることはできないが、相互排他的な相互前提関係としてのみ規定される表現面と内容面や、言語を非記号的な要素体系とみなす言語素論は、シニフィエに対するシニフィアンの優位性や意味性を中性化するものである。そして、これが、『千のプラトール』での記号のシニフィアンの体制への批判を可能にする理論的な要であることは間違いない。

## 2-2. 言語図式と抽象機械の位置について

このように、言語記号や表現と内容などの概念が『千のプラトール』にもたらした影響は重要である。しかしながら本稿で着目したいのは、言語図式と抽象機械の関係である。というのも、「はじめに」で述べたように、抽象機械こそが地層化と脱地層化を可能にする原理であり、言語図式がその理論的な着想源になっていると考えられるためである<sup>9)</sup>。

『千のプラトール』では言語素論にしたがって、あらゆる事象が表現と内容のそれぞれの形式と実質からなる地層として説明されている。抽象機械は、地層にかかわる概念として論じられており、一方では地層を可能にする「統合態」(œcumène)として、他方では創造性や生成変化をもたらす「平面態」(planomène)として記述されている。抽象機械の由来そのものは、実のところ明示的には語られていないのだが、手がかりとなる一節を、第四プラトール「言語学の公準」に見いだすことができる。

ドゥルーズ＝ガタリは、言語活動を地層の観点から捉えつつ、言語変化やその創造性にかんして次のように論じている。

変化と創造の線は、全面的かつ直接的に、抽象機械の部分をなしている。イエルムスレウは、ひとつの言語が必然的にまだ未開発の可能性を含んでいること、そして、抽象機械はこのような可能性とポテンシャルを含んでいることに注目していた。たしかに、「ポテンシャル」、「潜在的なもの」は、現実的なものと対立しない。それとは反対に、創造的なもの



のの現実性、つまり可変素＝変数〔variables〕を連続変化の状態に導くことこそが、可変素＝変数の恒常的な関係の現働的な規定と対立するだけなのである。(Deleuze et Guattari 1980:125/上 207-208)

ドゥルーズ＝ガタリは、「可能性」や「ポテンシャル」、「潜在的」という様相によって、抽象機械を規定している。本稿にとって重要なのは、イェルムスレウこそが言語のもつこの可能性に注目していたのだと、ドゥルーズ＝ガタリが明言しつつ、註でイェルムスレウのテキストを指示していることである。そしてそこでは、ほかでもない言語図式が論じられている。

該当するテキストでイェルムスレウは、ある言語が同じものにとどまりつつも、新しい記号を形成しうることを説明しているのだが、その原理として、言語図式（引用文では言語構造）がもち出されている。

言語のなかの各要素は、したがって、ある一定の結合の可能性はあるが、他の結合の可能性は排除されるということで定義される一定のカテゴリーに帰属する。これらのカテゴリーが、その定義によって、言語の要素体系、あるいはまた、われわれが言語構造と呼ぶものを構成する。  
(Hjelmslev 1966:59/50)

言語には、相互に結合可能であったり不可能であったりする要素が含まれている。先にみた記号素で言えば、フランス語の /r/ という音声形式は、母音などの他の要素との関係で、特定の位置に現れうるカテゴリーとして定義される。たとえばフランス語において、/trappe/ は可能だが /rtappe/ は不可能である (Hjelmslev 1971b:80)。つまり、ある言語図式において許容される要素間の結合規則にしたがってれば、言語としての同一性を損なうことなく、新しい記号の形成といった言語の変化や創造性が説明できるのである。イェルムスレウ自身が示す例にしたがえば、英語の「bip」や「mit」といった、今はまだ用いられていないが、新たに用いられうる言語記号が得られることになる (Hjelmslev 1966:57/46)。

### 2-3. 言語図式と抽象機械のもつ可能性と創造性について

このように、言語図式とは、相互に組み合わせ可能であったり不可能であったりする要素の体系なのであって、これらの要素が組み合わせられるこ

とで、語や文が形成される。つまり言語図式は、既存の確認された組み合わせだけでなく、新たな組み合わせも可能にするのである。そして言語図式という恒常性は、既述の通り、どのような仕方でも表出されうる「実現されるもの」としての可能性にほかならない。したがって、ドゥルーズ＝ガタリの用語法にならうなら、言語図式とは、現働的ではないような、ポテンシャル的で潜在的で現実的な可能性なのである。

こうした議論を踏まえ、ドゥルーズ＝ガタリは、抽象機械が可能にする言語的な創造を説明している<sup>(10)</sup>。そこで例として挙げられるのは／he did his dance／という英語表現が迎える奇妙な変形である。この／he did his dance／という表現を文法的に変形することで／he danced his dance／が得られ、さらに変形を続けることで／he danced what he did／を、そして最終的には／he danced his did／という非文法的な表現を得ることができる（Deleuze et Guattari 1980:125/上 208）。この操作は、／he did his dance／に対応する内容面はそのままに、表現面を連続的に変形させるものであり、最終的には、英語としては非定型的な表現にまで至ってしまう（表現面の要素を可變的とみなして連続的に変形させていく操作）<sup>(11)</sup>。ひとつの同じ内容面と関連しうる、可能な言語的要素の組み合わせが、たしかに英語と認められはするが、奇異に思えるほど新しい表現をもたらすのである。あるいはむしろ、そのような表現こそが、組み合わせ可能性としての言語の本質を、ひいては抽象機械がもつ可能性やポテンシャルをよりよく示すのである。

ドゥルーズ＝ガタリの抽象機械は、言語図式という可能性に由来している。ここでの要点は、言語図式が組み合わせ可能な要素の体系であるため、これに基づくことで言語使用が可能になるということと、これには、確認された言語使用から得られる「規範」(norme)を逸脱する可能性も含まれているということである<sup>(12)</sup>。純粋な可能性である言語図式にこそ、現働的に観察されうる言語使用や規範は依存しているのである（Hjelmslev 1971b:86）。こうした論点は、実のところ、イェルムスレウ自身が主張するものである。

このことからつぎのように結論できる。ある言語を記述しようとする場合、最悪の手続きは、表面的で外在的な観察が使用可能な唯一のものと提示するであろう手続き、すなわち、当該言語で用いられている記号の列挙から始める手続きであろう。（Hjelmslev 1966:61/52）

この段階ではおそらく、ドゥルーズ＝ガタリとイェルムスレウの論は、軌を一にしている。つまり両者はともに、チョムスキーのような、現働的な言語使用にもとづいて規範を設定する分析手法を批判し、非定型的とみなされるような表現をも生み出してしまいう創造性に着目しているのである。だからこそ、「イェルムスレウは、ひとつの言語が必然的にまだ未開発の可能性を含んでいること、そして、抽象機械はこのようなポテンシャルと潜在性を含んでいることに注目していた」(Deleuze et Guattari 1980:125/上 207-208)とされるのである。まさに言語図式とは、それなくしてはあらゆる言語使用が成立しないような、現実的な可能性なのである。

### 3. 言語図式と抽象機械、絶対的脱領土化の運動

#### 3-1. 抽象機械のもうひとつの側面について

組み合わせ可能な要素体系としての言語図式は、言語の重層性＝地層化 (stratification) をなす表現と内容それぞれの形式と実質の条件であり、言語に変化や創造性をもたらさう。そしてドゥルーズ＝ガタリは、言語図式という可能性の概念をもとに抽象機械を練り上げているのであって、この時点では、イェルムスレウが想定した言語素論の射程を踏み越えてはいないと言えるであろう。しかしながら、ドゥルーズ＝ガタリはここからさらに歩を進め、言語素論のポテンシャルを意想外なところまで展開していく。

この前進を辿るにあたって参考になるのは、抽象機械の創造性をもつとされる、ある性格についての記述である。そこでは、抽象機械の創造性が二つの状態からなるとされ、次のように論じられている。

ひとつは、そこにおいて、内容と表現の可変素＝変数が、それらの異なる形式にしたがって、ひとつの存立平面 [plan de consistance] 上で相互前提関係に配置されるという状態、もうひとつは、そこで、同じ平面の可変性がたしかに形式の二重性よりも優位に立ち、形式を「識別不可能」にしてしまうため、もはや内容と表現の可変素＝変数を区別することさえできなくなるような状態である (はじめの状態はいまだ相対的な脱領土化にかかわるものだが、第二の状態は、脱領土化の絶対的な域に

達してしまうだろう)。(Deleuze et Guattari 1980:116/上 194)

この記述は難解であるが、その要点は、表現と内容の形式の区別が維持されるか否かにある。すなわち、地層が保たれるかどうかである。そして、これらの形式の区別が維持されなくなる状態、つまり識別できなくなるときに、抽象機械は絶対的な脱領土化に至るのだという。ここで論じられていることは、形式と実質の区別からなる地層を脱すること、脱地層化の運動にほかならず、ここから、前節で確認した言語の創造性が、実のところ相対的なものでしかなかったということが理解される。というのも、「bip」や「he danced his did」といった事例の創造性は、表現面がもつ独自の形式（記号素や文法的な要素）の逸脱した組み合わせにあるのだが、そこではいまだ、相互前提（すなわち連帯関係）に置かれる表現の形式と内容の形式の区別が維持されているためである<sup>(13)</sup>。つまり、これらの事例では、表現面や内容面のものとして区別される形式にしたがった創造性の関を出ないのである。

先の引用で示されているのは、抽象機械（言語図式）という可能性が、もうひとつの創造的な側面をもっているということである。ドゥルーズ＝ガタリの記述は容易な理解を拒むようであるが、糸口がないわけではない。上に引いたテキストの直前には、次のような註が付されている。

つまりイエラムスレウの威力とは、表現の形式と内容の形式〔すなわち恒常素＝定数〕を、二つのまったく相対的な可変素＝変数として、同じひとつの平面上で、「同じひとつの機能の機能素」（『言語理論序説』p. 85 [77-78]）としてとらえたことである。しかしながら、抽象機械のダイアグラムの考えへの前進は、次の点ではばまれている。すなわちイエラムスレウは、まだ、表現と内容の区別を、シニフィアン－シニフィエの様態で考えており、こうして、抽象機械を言語学に依存させたままである。(Deleuze et Guattari 1980:115-116 n. 18/上 354 n. 18)

ドゥルーズ＝ガタリの理解によれば、恒常素として記述されてきた表現と内容の形式は、ある機能の機能素としては、可変素とみなされることになる。つまり、ここで言われる「同じひとつの平面上」では、表現と内容の形式は、どちらであってもよくなるのであり、その区別は非示差的になる。そして、このような考えにまで「前進」できたはずの者こそが、ほかならない

イェルムスレウなのである。残念ながら、ドゥルーズ＝ガタリは言語素論的にこれ以上具体的な記述を与えてはいないのだが、抽象機械が言語図式と同様の可能性として規定されるのならば、その「前進」は、言語素論の延長線上でなされているであろう。つまり、言語素論の言語図式を徹底化することによって、ドゥルーズ＝ガタリの言う絶対的な域へと至る「前進」をたどることができるはずである<sup>(14)</sup>。

### 3-2. 言語図式について、再び

ここでもう一度、フランス語という言語図式を考えてみたい。フランス語は、表現面と内容面それぞれがもつ要素体系からなるものとして定義される。たとえば、辞書に記載されているような観念的な内容の要素体系と、それに対応する書記的な記号表現の要素体系を考えることができる。しかしながら、ある記号内容には、音声的な表現などの別の表現形式が対応すると考えることもできる<sup>(15)</sup>。実際にイェルムスレウは、書記と音声の表現で要素体系が異なる可能性を示し、複数の表現面が認められる可能性を示唆している<sup>(16)</sup>。このことは、次の決定的な記述に端的にまとめられている。

完全さのためにさらに加えて言うなら、少なくとも理論的には、ある言語記号は、二つ以上の面を含みうる。(Hjelmslev 1971a:59)

この記述は、ある言語記号に新たな面が付け加わる可能性を示している。そしてこのことから、表現面の要素体系が可変的であるという帰結が導ける。たとえば、音声言語しかなかったところに、文字が伝わり、その後、その言語の話者がいなくなり、書物だけが残ったとする。このとき、書記的要素体系が付け加わる瞬間と音声的要素体系が消滅する瞬間のそれぞれの前後では、内容面に連関する表現体系はその都度異なるが、言語としては同じ資格をもつと言えるであろう。そうであるなら、ある内容面と連帯関係（「記号機能」(fonction sémiotique)）をもつ表現面は、表音的でも書記的でもよく、その体系は可変的であると言える。この主張を可能にしているのは、分析の手続き上、面の区別と形式の区別が分けられ、なおかつ、前者が後者よりも上位にあるとする次の定義である。「[形式の内容や実質の内容などと言われないことから、面の区別が上位にあると分かるように] 内容と表現のあい

だの区別は第一の交差点であり、形式と実質の区別は第二の交差点なのであって、そしてだからこそ、形式と実質の区別は、諸平面のあいだの区別より下位にあるのだ」(Hjelmslev 1971a:52)。この定義にしたがえば、面の区別に分析の焦点があるとき、それよりも下位にある形式の区別は非示差的であるため、表現の要素体系は書記や表音のどちらでも構わないのである。

また、イェルムスレウは内容体系の複数性については語らないが、理論上、それも十分可能である。というのも、連帯関係にある相互排他的な要素体系としてしか、表現面と内容面が定義されないため、内容面の体系を、いわゆる観念的なものに限定する理由はないからである。したがって、内容面に観念的な要素体系と書記的な要素体系を割り振り、表現面に表音的な体系を割り振ることも可能である。あるいは、極端に言えば、表現面に書記的要素体系を、内容面には表音的要素体系をもつフランス語の言語図式なるものでさえ可能である。事実、イェルムスレウ自身が、音楽は言語記号とみなされうるかと問いを立てているが、このことは、表音体系と書記体系の記号機能の成立の可能性を示すに十分であろう (Cf. Hjelmslev 1968:142/131)。

### 3-3. 言語図式と抽象機械の絶対的な脱領土化の先端について

このように考えるなら、ドゥルーズ＝ガタリが論じる通り、表現や内容の形式は可變的になっていると言えるであろう。つまり、言語素論の徹底化が、ドゥルーズ＝ガタリの言う絶対的な脱領土化、脱地層化を導くのである。

あらためて論点を確認しておこう。言語素論の定義上、表現面と内容面は相互排他的にしか規定されず、面と形式は分析上区別される。ここから帰結しうるのが、書記体系を表現面に、表音体系を内容面に割り振るという奇妙な事態である。こうして明らかになるのは、ある面の形式として、どのような要素体系を認めても構わないということにほかならない。つまり、書記体系と観念体系の対も、表音体系と観念体系の対も、書記体系と表音体系の対も、あるいはそれらの三つ組みも、等しくフランス語としての資格をもつ以上、フランス語がフランス語であるためには、極端に言えば、どの要素体系がどの面に帰属するのかが重要ではないのである。そして、ここにおいてこそ、ドゥルーズ＝ガタリが言うように、それらの要素体系（すなわち諸々の形式）は可變的になっているのである。

ここで、表現と内容の面のどちらをどう呼んでも構わないというイェル

ムスレウの有名な定式は、特定の面に属する要素体系の他の面への反転可能性として、あるいは表現面と内容面の識別不可能性として理解できるようになる (Cf. Hjelmslev 1968:79/72; 江川 2014:126)。そして、分析による抽象化の果てに見いだされる言語図式は、なんらかの要素体系を表現面や内容面の形式として割り振り結びつける接続詞「と」のように機能しており、異質な面同士を連帯関係に置く記号機能と識別しがたくなる (Cf. Hjelmslev 1968:66/59)。これこそがまさに、ドゥルーズ＝ガタリが称するところの「イエームスレウの威力」であり、抽象機械を準備するのである。

こうして、ドゥルーズ＝ガタリの抽象機械の理論は、言語図式の徹底化として、言語素論の延長線上で理解することができる。ここから、「存立平面は〈抽象機械〉によって占められ、横断される」(Deleuze et Guattari 1980:90/上 154) という記述に続く、次の一節を理解することができるであろう。

[……] 諸々の内容と表現のもとで、存立平面 (あるいは抽象機械) は、記号 - 微粒子 [*signes-particules*] (分節子 [*particles*]) を発し、また組み合わせ、この記号 - 微粒子は、最高度に脱領土化された微粒子のうちに最も非意味的な記号を機能させる。(Deleuze et Guattari 1980:90/上 155)

抽象機械は、脱地層化をもたらす平面態として機能するかぎりでは、存立平面と重なる (統合態に対する存立平面の平面態)<sup>(17)</sup>。脱地層化の運動における抽象機械は、もはや表現面と内容面の区別がつかない (あるいはその両方である) 記号 - 微粒子を発し、組み合わせる。これはまさに、表現面と内容面に、どのようにも諸々の要素体系 (すなわち非記号的な記号素) を組み合わせ、連帯関係に置くことのできる言語図式と同様の機能である。言語図式という最高度に抽象的な水準にあって、表現面でも内容面でもなく、あるいはその両方でもあるが、いまだどちらの面の形式でもない記号素が、ただ他の記号素との関係により規定され、体系をなし、組み合わせられる。それと同じように、抽象機械は、「最高度に脱領土化」しているが未分化でもカオスでも決してない記号 - 微粒子を発し、組み合わせるのである<sup>(18)</sup>。

まとめよう。言語素論が提示する分析は、抽象性に到達するための手続きである。言語素論の分析は、実際のテキストから出発して、テキストに還元されない純粋な抽象性に到達するのであり、形式をも可変的にしていく操作である。そして、具体的なものから抽象的ではあるが特異的なもの (フラ

ンス語や英語なるもの)へと向かう脱領土化の先端に、言語図式は位置している。これこそが、ドゥルーズ＝ガタリが抽象機械の理論に取り入れるものである。脱領土化の先端で、つまり脱地層化した地点で、抽象機械は、要素体系の連帯関係を可能にする連結の原理として機能しているのである。

ところで、この絶対的な脱領土化から、さらに重要な帰結が導かれる。形式が可變的となり、どの要素体系がどの面にでも取り入れられうるのなら、同じひとつの言語図式あるいは抽象機械にとどまりながらも、現働的にはそこに含まれていない要素体系をも新たに取り入れることが可能になる。たとえば、ただひとつの表現体系しかもたない言語であっても、複数の表現体系をもつ英語やフランス語などに値するとイエルクスレウが言うように、ある言語が新たな表現あるいは内容の体系をもつこともありうる<sup>(19)</sup>。本稿では、この帰結の射程を明らかにするために、抽象機械と絶対的脱領土化の観点から「マイナー言語への生成変化」を解釈し、考察をさらに進めたい。

## 4. ドゥルーズ＝ガタリによる言語素論の徹底化の帰結

### 4-1. 言語図式とマイナー言語への生成変化について

ドゥルーズ＝ガタリは、言語の創造性と実践を説明するにあたり、多言語併用をしばしば取り上げている。『千のプラトール』で着目されるのは、フランスにみられる英語への影響や、チェコという土地でユダヤ人としてドイツ語で書くカフカの文学的実践である。いわば、マジョリティの言語とマイノリティの言語、マイナー言語とメジャー言語の共存が念頭に置かれているのだが、ドゥルーズ＝ガタリにとって問題なのは、マイノリティの言語を話すことではない。つまり、「問題はメジャー言語とマイナー言語の区別ではなく、生成変化の問題である。問われているのは方言や地方語の上に再領土化してしまうことではなく、メジャー言語を脱領土化させることなのである」(Deleuze et Guattari 1980:132/上 218)。ここで言われるメジャー言語の脱領土化は、マイナー言語を用いることで、あくまでも英語やフランス語といったメジャー言語の方を「逃走させる」(Deleuze et Guattari 1980:133/上 219) こと、生成変化させることである。したがって、自由間接話法にかん



するパズリーニの一節に託して言われるように、「言語Aにほかならないが、実際は言語Bになりつつある言語X」(Deleuze et Guattari 1980:134/上 221)こそが問題なのである。

それでは、メジャー言語がマイナー言語に生成変化するとは、どういうことであろうか。こうした一連の記述が、これまでに見てきた脱領土化の運動を前提にしていることに鑑みれば、先に引き出した言語素論的な帰結から説明することが可能なはずである。

すでに論じたように、言語図式は、同じものにとどまりつつも、表現面や内容面に、新しい要素体系を取り入れることが可能である。そうであるのなら、ある言語図式が、外国語とみなされる言語の表現面や内容面の体系を、新たな要素体系として取り入れることも可能である。すなわち、フランス語に属する表音体系を、新たな要素体系として英語の表現面に取り入れることでさえも可能である。フランス語のものであった要素体系を、英語の内容体系に連関する表現体系として割り振るのである。このとき、その表音体系は、フランス語の表現形式であることをやめて、英語にとっても可能な要素体系になるのであり、フランス語にも英語にも属しうようになる。つまりこの要素体系が、フランス語と英語が識別不可能になる地帯をつくり出すことになる。こうして、英語は、フランス語であることなしに、フランス語になるのであり、同時に、フランス語も英語になるのである。

#### 4-2. ウルフソンの実践あるいは言語と非言語的なものについて

このように、メジャー言語のマイナー言語への生成変化は、言語素論の延長線上に位置すると考えられる。ドゥルーズ=ガタリは同様の実践としてルイス・ウルフソンに着目しているのだが、その実践は、言語が必然的に異質な要素を取り込み、非言語的なものを巻き込んでいくことを示している<sup>(20)</sup>。

分裂病者であるウルフソンにとって、文字通り母親の言語である母語の英語は耐え難いものであり、それを無害にするために、ウルフソンは耳にした英語を、ただちに音と意味内容が似た外国語の単語に訳してしまう。たとえば、「eaRLy」という語は、「suR Le champ」、「de bonne heuRe」、「matinaLement」、「diLigement」、「dévoRer L'espace」そして「à La paRoLe」といったフランス語に訳される。一見するとこれは、翻訳の事例のように思えるのだが、ド

ウルーズ＝ガタリは、あくまでも生成変化にかかわるものとして取り上げている。つまり、ここで問題にすべきは、英語から外国語への翻訳ではなく、英語の外国語への生成変化なのである。

それでは、ウルフソンの実践は、どのように解釈できるのであろうか。これまでの解釈を踏まえれば、次のように言えるであろう。まず、ウルフソンは、英語の形式と外国語の形式を組み合わせる。つぎに、抽象機械（言語図式）は、英語の形式と外国語の形式を相互前提状態に置くために、両者を英語や外国語として固定された形式ではなく、流動的に割り当て可能な記号 - 微粒子（要素体系）にする。そして、英語は新たな形式を獲得する。この一連の操作によって、外国語の形式として固定されていた記号 - 微粒子が、もとの外国語にも英語にも属するようになるため、これが「識別不可能な」地帯となり、そこで両言語が同時に現前し、「近傍域」に入ることになる<sup>(21)</sup>。こうして英語は、英語にとどまりながら、外国語へ生成変化するのである。

このような言語実践は、言語図式のもつ創造性を徹底するあまり、その言語としての姿を極端なまでに変形してしまう。言語素論にしたがえば、英語は、そのなかでフランス語的な要素を機能させるとしても、英語であるのだが、はたしてどこまで、それを英語と呼ぶ必要があるのであろうか。このように異質な要素体系同士を結びつけるものを、言語と呼ぶ必然性などなくなってしまうのではないか。だからこそドゥルーズ＝ガタリは、「言語の抽象機械」という考えを、「十分に抽象的ではない」ことを理由に退け、抽象機械として概念化し直しているのである（Deleuze et Guattari 1980:176/上 290）。

ウルフソンが作動させる抽象機械は、言語論的な射程を超えていく実践へと、彼を導いてしまう。それはもはや、言語的なものではなく、非言語的でありさえするものであり、ウルフソンの生に「内在的」で「特異的」なものである（Deleuze et Guattari 1980:637/下 317）。つまり、抽象機械概念への彫琢によって、言語図式は非言語的なものになるのである。実際に、ウルフソンが作動させる抽象機械は、分裂病的に機能し、母国語をマイナー言語への生成変化を導き、記号 - 微粒子を取り出してくるだけでなく、拒食症的にも機能するのであり、栄養素の形式には帰属させられない食物の微粒子をももぎ取ってくる（Deleuze et Guattari 1980:334/中 235）。抽象機械は、英語やフランス語、言語や物といった区別をせずに、さまざまな要素体系を連結

していき、生成変化したい当のものへの「欲望のプロセス」(Deleuze et Guattari 1980:334/上 234-235)を開始させるのである<sup>(22)</sup>。

こうした生成変化は、ともすると無秩序であると思われるかもしれない。しかしながら、諸々の要素体系の連結をなすウルフソンの実践が特異的であるように、抽象機械は「なんでもあり」ではなく、その接続もまた「どのようでもなされるわけではない」(Deleuze et Guattari 1980:91/上 156)。このことは、イェルムスレウが言語学者の役割について論じる次の一節からも理解することができる。

[ある内容体系に多様な表現体系が対応しうるので] 言語学者の務めは、したがって、ただ実際に確認される表現体系を記述することだけではなく、どのようなものがある内容体系の表現の体系として可能であるのか、また、この反対であるのかを計算することである。(Hjelmslev 1968:133/123)

ある言語図式は、どの要素体系をどの面に取り入れるとしても、同じものであり続けるため、全く新しい要素体系を取り入れることも可能である。だからこそ、言語学者は、そのような体系を受け入れられるかどうか検討し、さらには、「自然的」あるいは「確認された」表出を欠いた、潜在的である」(Hjelmslev 1968:134/123) 言語類型の可能性でさえも計算しなければならない。それはまさに、ウルフソンが特異的な規則に基づいた実践に身を投じていたように、厳密な計算にもとづいて、現働的には与えられてはいない言語の可能性を描き出すことなのである。つまり、「意想外な生成変化を発明するためには」(Deleuze et Guattari 1980:134-135/上 222)、「最悪の方法」である「当該言語で用いられる記号の列挙」に訴えることなく、新たな言語的要素や非言語的な要素との連結可能性の検討や、ときには、異質な言語図式や抽象機械同士の連結可能性さえも検討しなければならないのである。

## おわりに

それでは、何が連結を可能にするのであろうか。最後に、この問題について、言語素論の「意味 - 質料」(sens-matière)を通して考察し、論を閉じる

ことにしたい。

言語素論において、意味 - 質料とは、非物的なもの（可能的なもの）とみなされる形式＝恒常性とは反対に、形式化されていないためにあらゆる形式を表出する「物質」（le matériel）＝「可変素の類」である（Cf. Hjelmslev 1968:167; Hjelmslev 1971a:58; Hjelmslev 1971b:87）。ドゥルーズ＝ガタリは、この概念を独自に理解し、異質な要素に「共通する質料」（Deleuze et Guattari 1980:138/上 227）という資格で、関係をもたないはずの要素体系同士を関係づけ、連結するものとして論じている。ウルフソンの実践に即せば、英語とフランス語の要素の連結は、英語の表現実質／eaRly／とフランス語の表現実質／suR Le temps／に共通する意味 - 質料、すなわち物質を通じてなされていると言える。つまり、英語の形式／r／とフランス語の形式／r／は、それぞれ異なる体系に属するため同一の形式ではなく、異質な要素であるのだが、どちらも同じような物質において実現されるのであり、だからこそ、その物質を「中間」にして「非論理的に」連結されるのである（Cf. Deleuze et Guattari 1980:632-633/下 310-311）。精確を期して言えば、地層化されえない物質「r」すなわち「器官なき身体」の存立性の度合いが高められることで、齟齬するもの（英語の意味 - 質料／r／とフランス語の意味 - 質料／r／）が存立し、それら齟齬するものと連関関係をもつ、要素体系同士が連結する（Cf. Deleuze et Guattari 1980:632-633/下 310）。つまり、十分に抽象化された要素の連結をもたらすのは、それと同程度に抽象的に思考された物質、器官なき身体という存立性の物質なのである<sup>(23)</sup>。

以上のように、本稿が跡づけたのは、言語素論から『千のプラトー』に至る道程であり、言語図式の抽象性から抽象機械へと走る生成変化の線である。言語素論の概念は、ドゥルーズ＝ガタリによって鍛え直されるのであって、たとえそれが言語素論の用語法の「乱用」（abus）であると言われたとしても、言語図式が抽象的な機械として機能しはじめることを止めることなどできない<sup>(24)</sup>。そして、この徹底した抽象性のもとで、はじめて、純粹な物質が思考される。脱地層化の運動を通じて、器官なき身体と抽象機械はともに「機械状」になっていき、地球としての「巨大な〈分子〉」や「機械圏」という「宇宙的なもの」（le cosmique）の時代が到来する（Cf. Deleuze et Guattari 1980:408/中 359; 53/上 93; 640-641/下 323; 422/中 384）。

## 注

- (1) 本稿では詳論できないが、ここでは「冗長性」（「頻度」と「共振」、それに次ぐ第三の形式「と」(et)）も重要な役割を果たしていると考えられ、表象は「人間形態的地層」(strates anthropomorphes) において説明される事柄のひとつになる (Cf. Deleuze et Guattari 1980:54/上 93; 165-168/上 273-276; 81/上 138)。
- (2) 江川は、地層化と脱地層化という「二つのベクトルの差異」(江川 2014:202) として抽象機械の「平面態」と「統合態」を定式化している。
- (3) 本稿では、言語図式を抽象機械の着想源とみなすが、ガタリは超歴史的なコードとしての「純粋な図式」(Guattari 2004:299-300/284-285) には懐疑的である。本稿が最終的に示す解釈は、これと相容れないものでは決していない。
- (4) 以下では、//で表現面、〈 〉で内容面を表す。そして、これら二つの面からなる言語記号を「 」で表す (これは通常の鍵括弧としても用いる)。
- (5) この例では、Ducrot (1968:71/66) を参考にしたが、この伝統的な文法用語による説明が、言語素論的に妥当であるかは検討の余地があると思われる。
- (6) たとえば数学や論理学の記号のように、記号の表現面と内容面がもつそれぞれの体系が同一であるなら、それらを区別する必要がないため、ひとつの面の分析だけで悉尽的であるが、これに対して、表現面と内容面に異質な体系が認められるのであれば、一方が他方に還元されないため、悉尽的な記述のために、両面を対象にしなければならない (Hjelmslev 1968:141/129)。
- (7) 言語素論の「表出」(manifestation) という機能では、個々の発音などは実質 (可変素) と呼ばれ、それが実現するところの形式 (恒常素) とは区別される。たとえば言語形式「睫毛」の実質は、その度毎に異なる音程やリズムをもつ実際の発音/まつげ/や、「星座を睫毛に引っかけて」という文などにより、具体的に思い描かれる〈睫毛〉である。
- (8) 「このようにフランス語の *r* は、対立的で関係的でネガティブな実体として定義される。一定の定義は、それがどのようなものであれ、いかなる実定的な質も *r* に帰属させることがないのである。この定義が含むのは、*r* が実現されうるものであるということであって、それが実現されたものではないということである。この定義は、どのような表出の余地でも残したままにする」(Hjelmslev 1971b:81)。
- (9) Guattari (1979:41 n. 29/378 n. 29) では、チョムスキーの生成文法を換骨奪胎することで抽象機械を練り上げたと述べられるが、当該言語の文を生成する原理 (生成文法) に相当するのは、言語素論では言語図式しかありえない。本稿の解釈に最も近いものに、Badir (2004) があり、そこでは、抽象機械 (平面態) との区別がされていないようだが、「器官なき身体」を、「言語構造」と結びつけ、言語が社会文化的に行使されるための「主要な条件」として捉える点で妥当である (Cf. Badir 2004:190/202)。あるいは、「[……] イェルムスレウが決して検討しないもの」(Guattari 1977:265/69) と言われるところの「形式」を抽象機械として定義するガタリの記述に着目して、解釈することもできるだろう。おそらくこの定義は、記号機能という「最も本質的な水準」(Guattari 2011:162/183) で構成される形式間の連帯性としての抽象機械の定義に近い (そしてこれは本稿

の平面態の解釈に近い)。というのも言語素論では、記号機能が形式により「縮約されたもの」(Hjelmslev 1971a:54)と記述されているためである。いずれにせよ、ここで問題にされる形式とは、本稿の第一節で確認してきたものではなく、二つの面を相互前提関係に置く記号機能を成立させる機能である(そもそも単なる形式は、ドゥルーズ＝ガタリが退ける当のものでしかない)。こうした点に鑑みると、表現と内容を同時に考慮する言語記号の形式を中心に解釈することも可能に思えるのだが、抽象機械が複数の形式(や非記号的な要素)を考慮する概念であることと、「言語の形式」と定義される言語図式が多数の形式からなることを踏まえると、言語図式に着目する方が妥当であろう(Cf. Deleuze et Guattari 1980:175/上 289; Hjelmslev 1968:168)。なお、本稿が理解する言語図式(すなわち抽象機械)は、デリダの「原-エクリチュール」概念に近いように思われる。デリダ自身は言語素論を批判しているのだが、言語素論の射程の再検討と再画定を迫ることで、かえってこの言語論をより遠くへと導いているようにも思える(Cf. Derrida 1967:88-91/120-124; Badir 2014:73-76; Badir 2004:22/13; 江川 2014:261 n. 13)。そうであるなら、「じかに」(Guattari 1977:261/65)「書くこと」(Deleuze et Guattari 1980:84/上 14)を論じるドゥルーズ＝ガタリ(およびイェルムスレウ)の思考と、デリダの思考を分かち分岐点について検討すべきである(デリダ側からの検討としては、小川(2017)を参照されたい)。

- (10) ガタリもまた、記号素の創造性を評価している(Cf. Guattari 2011:161/181)。
- (11) 内容面の連続変化については、Deleuze et Guattari (1980:119/上 199)を参照。
- (12) 言語素論では、形式は純粋な可能性として定義されるため、物質的に現実化されたものに還元されない「非物的なもの[l'incorporel]」(Hjelmslev 1971b:87)であるが、これに対して規範は、「物的な言語形式」(「ふるえ音」のような弁別特徴により規定される音声形式/r/など)として定義される(Hjelmslev 1971b:80)。したがって、規範にのみ着目する分析では不十分である。Badir (2004:65/63)では、規範に価値を置く言語理論として生成文法が挙げられているが、こうした規範批判の観点から、『千のプラトー』におけるチョムスキーらの位置づけを検討する必要があるように思われる(Cf. Deleuze et Guattari 1980:217-218/中 32-34; 220/中 37)。
- (13) 言語素論では、言語記号の一方の面の要素を他のものと交換することで、他方の面でも同様の交換が起これば別の言語記号として認められる(Hjelmslev 1968:86/78)。ここでは、表現面/hip/と/bip/の交換に対応するであろう内容面での交換が想定されるため、二つの面の形式の区別が維持されている。
- (14) この記述では、表現面と内容面を関係づける記号機能と、それに対応する存立平面が示唆されているようにも思える。こうした理解は妥当にも思えるが、ここで問題にされているのが抽象機械であることや、註10で示した理由から、本稿ではこの解釈を取らない。とはいえ、抽象機械と存立平面や記号機能の関係は複雑であるため、解釈には慎重さが必要である(Cf. 註17)。これらの概念にかんする、本稿と近い解釈にAurola (2017)があり、この論文では、記号機能や言語図式には言及されないが、これらに相当するであろうソシュールの「恣意性」や「記号」と「構造」を通じて、『意味の論理学』の構造概念から機械概念に至る変遷が解釈されている。そのなかで、『千のプラトー』と社会言語学の

関係も考察されており、チョムスキー派に対するウィリアム・ラボフの学説とともに展開された「変数」(variables)の議論も射程に収められている。これについて付言すれば、言語素論の「共示記号」(sémiotique connotative)に親和的な社会的変数の発見よりも、「可変の規則」(règle de variable)の考察に基づいた言語に内的な変化の発見が、生成変化の問題系のもとで論じられるべきラボフの最大の成果であるだろう。

- (15) たとえば、「鼻紙」と書いて「クリネックス」と歌わせる場合を考えてみるとよい。これはたんに、表現形式／鼻紙／の変異体として表音的表現実質／はながみ／と／クリネックス／が認められるということではない。そうではなく、内容面（鼻紙）に対応して、書記的表現面／鼻紙／だけでなく、表音的表現面／クリネックス／も認められるということである。ここでは、異質な要素からなる三つの体系に属するそれぞれの形式が連帯関係をもつと考えられるのである。同様に、言語記号「旅客機」が、内容面（旅客機）と、書記的表現面／旅客機／と表音的表現面／ボーイング／をもつことも可能である。
- (16) 「[ある形式がさまざまな実質により表出されるということへの] 第二の反対意見が認めるのは、多くの場合、「実質」の変化が言語形式の変化を伴うということ、したがって、すべての書記が「表音的」であるというのではなく、分析の結果、異なる組成素目録が出来上がり、おそらく話し言葉とは異なるカテゴリーが得られるかもしれないということである。[……] 第二の反対意見も第一のものと同様に関与的ではない。なぜならそれは、言語形式がある実質において表出されているという一般事実を変更するものではないからである。しかしながら、この観察はまったく同じ内容体系に、さまざまに異なる表現体系が対応しようということを示している点で興味深い」(Hjelmslev 1968:132-133/122)。また、音韻論的な記号表記法の形式とアルファベットや手旗信号による形式の違いを認める記述もある (Hjelmslev 1971a:58)。Guattari (2004:316-317/297-298) ではこれが、記号学における「二平面主義」の乗り越えとして、また「多平面主義」の可能性を提示したとして評価されている。
- (17) 存立平面と器官なき身体は、言語素論の意味 - 質料であると定義されている (Deleuze et Guattari 1980:58/上 100-101)。しかしながら本文で引用したように、存立平面は、抽象機械と部分的に重なる平面態としても論じられており（したがって、抽象機械も意味 - 質料と重ねられており）、さらには、表現と内容を連帯関係に置く記号機能のようにも記述されている (Cf. Deleuze et Guattari 1980:90/上 155; 176 n. 37/363 n. 37; 116/上 194)。つまり、存立平面は、意味 - 質料であり、平面態の抽象機械（言語図式）であり、記号機能であるということになる。このことから、ドゥルーズ＝ガタリの言語素論理解に混乱を指摘することもできるが、イェルムスレウの言うあらゆる言語に「共通の要因」(facteur commun) が存立平面に対応していると考えられることもできる。「反対に、異なる言語を比較して、それによってこれらの言語に共通する要因、しかもどれほど多くの言語が考慮されようとも共通している要因を取り出す実験は正当なものであると思われる。記号機能と、これから演繹できるすべての機能を含み、それとしては必然的にあらゆる言語に共通するが、その実現 [exécution] はそれぞれの言語ごとに異なっている、本来の意味での構造原理 [principe de structure]、

こういう原理を除くなら、共通の要因とは、言語の構造原理と、言語相互に差異を生じさせるあらゆる要因との関係をもつ機能によって、はじめて定義される占在体ということになるだろう。この共通の要因を、われわれは意味と呼ぶことができる」(Hjelmslev 1968:68/61)。

- (18) 本稿の理解では、記号 - 微粒子は、実質としての同一性をもたないものとして、理論によって「潜在化され」(Guattari 1979:45/46)、想定されるものであるが、地層に捕らわれることで、特定の面の形式として固定されてしまう。ところで、この記号 - 微粒子は、表現の形式から取りだされると言われるのだが、表現だけに脱領土化が担われるのは言語素論的には不可解である (Cf. Deleuze et Guattari 1980:181/上 299)。実際にドゥルーズは、ガタリ宛の書簡で同様の疑義を呈している (Deleuze 2015:55/78)。これにはおそらく、分析により抽象される要素の組み合わせ (非言語的な機能の体系、「ダイアグラム」) が、抽象機械の表現面に置かれることと関連している。
- (19) 「したがって、その使用がただひとつの表現形式しか許さない言語に値するのは、同じ資格で、フランス語や英語のような、[……] 複数の形式を認める言語がもつ表現形式のひとつひとつ (つまり各々の  $g^{\circ}$  [内容や表現のなんらかの形式]) に値するのである」(Hjelmslev 1971a:59)。
- (20) 本稿とは異なる観点からではあるが、Lecerle (2008:64/95) でも、「ウルフソンの偽なる総合」が示すのは依然として英語であると論じられている。また、ドゥルーズのハイデガー論も同様に理解されうる (Cf. Deleuze 1993:122/199-200)。ウルフソンにかんしては、『批評と臨床』や『意味の論理学』でも論じられているが、これについては、本稿とは異なる観点から、「半端な器官なき身体」という独自の解釈を示す千葉 (2017) 第七章も参照されたい。
- (21) 本稿では、言語同士の形式の連結が、記号 - 微粒子をもたらずと解釈している。これについては、「具体的形式の交差点」や有機体同士の連結を論じる Deleuze et Guattari (1980:307-308/中 188; 334-336/中 234-237) を参照されたい。
- (22) 江川 (2014:141; 152) では、欲望が、原因などの様相ではない無様相の観点から捉えられ、「結びつきの不在それ自体による結合」と定式化されている。
- (23) 本稿の理解では、言語素論で言われる意味 - 質料とは、可能的で非物的な形式に対する、いわば可変性の物質であり、地層化はされていないが形式を表出しうる可変素 (実質になりうるもの) のことであり、『千のプラトー』での、脱地層化した物質、「系統流」(phylum) のことである。これに加えて、『千のプラトー』では、器官なき身体や存立平面という、地層化されえない純粋な物質が思考されている。これは、「驚くほどに単純化され、創造的に制限され、選別された」(Deleuze et Guattari 1980:426/中 389) 物質、あるいは意味 - 質料以前の物質 (実質になりえないもの) と呼びうるものであり、こう言ってよければ、イェルムスレウがなし得たもうひとつの「前進」の先に位置している。たとえば、フランス語の表現形式 /r/ はいかなる物質によっても表出されるため、「r」だけでなく「b」や「a」などの物質によっても実現されうる。「r」や「b」という物質そのもの (器官なき身体) は、表出を準備せずに、空間を占めるだけで「動かない」が、意味 - 質料 (系統流) という身分をもてば、その範囲内での連続変化が可能な「漠然」とした「表現特徴」(traits d'expressions) をもつ運動 - 質料



(フランス語の実質になる、意味 - 質料「r」の連続体)とみなされる (Cf. Deleuze et Guattari 1980:472/下 71; 84/下 121-122)。ここで注意されたいが、系統流の表現特徴は、英語やフランス語などの要素体系に対応するように選別されるため、英語とフランス語のものとして形成される系統流は異なっている (Cf. Deleuze et Guattari 1980:495/下 103)。このように、系統流は、変調しうる「金属」として器官なき身体を扱う「冶金術」によってつくられるのである (Deleuze et Guattari 1980:512/下 129)。しかしながら器官なき身体は、たしかに、どの系統流にもなりうるため、それが存立させる意味 - 質料とともに、特定の表現特徴をもつものとして見いだされるのだが、それ自体が他の器官なき身体(「ゐ」、「一」など)と存立してもいるため、特定の意味 - 質料に還元されることも、地層に捕獲されることもない。器官なき身体は、「此性」をもち識別可能ではあるが、つねに存立平面上で「齟齬するもの」と総合されているのである (Cf. Deleuze et Guattari 1980:632-634/下 310-312)。つまり、最終的に問題となるのは、異質な系統流の存立と連関する、異質な要素体系同士の連結であり、平面態での存立と連結の理論、すなわち抽象機械と器官なき身体との関係であり、また、それらの原理となる、器官なき身体それ自体の存立性である。

- (24) Hjelmslev (1971b:75-76) では、書記と表音の実質に記号機能を認める主張が「メタファーと用語法の乱用」とされ、警戒されている。本稿では、書記と表音の形式間の記号機能や、言語素論的な物質の二つの身分について解釈したが、これは、理論上可能ではあっても、「乱用」の類であるのかもしれない。

## 参考文献

\* 引用に際して、既訳があるものはそれを参考にしつつ、引用者が訳出し、原文／邦訳の順で頁数を指示している。また、〔 〕は引用者による。

- Aurora, Simone. 2017. From Structure to Machine: Deleuze and Guattari's Philosophy of Linguistics. in *Deleuze Studies* 11(3):405-428, Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Badir, Sémir. 2004. *Hjelmslev*, 2<sup>e</sup> tirage. Paris : Les Belles Lettres. (『イェルムスレウー—ソシュールの最大の後継者』町田健訳、東京：大修館書店、2007年)
- 2014. *Épistémologie sémiotique: La théorie du langage de Louis Hjelmslev*. Paris: Éditions Champion.
- Ducrot, Oswald. 1968. Le structuralisme en linguistique. dans *Qu'est-ce que la structuralisme?*. Paris: Le Seuil. (「言語学における構造主義」井村順一訳、『構造主義：言語学・詩学・人類学・精神分析学・哲学』渡辺一民・井村順一・松崎芳隆・伊藤晃・佐々木明訳、東京：筑摩書房、1978年)
- Deleuze, Gilles. 1993. *Critique et clinique*. Paris: Minuit. (『批評と臨床』守中高明・谷昌親訳、東京：河出書房新社、2007年)
- 2015. *Lettres et autres textes*, Minuit. (『ドゥルーズ——書簡とその他テクス

ト』宇野邦一・堀千晶訳、東京：河出書房新社、2016年)

Deleuze, Gilles et Guattari, Félix. 1980. *Mille Plateaux: Capitalisme et schizophrénie 2*.

Paris: Minuit. (『千のプラトー——資本主義と分裂症』上中下巻、宇野邦一・小沢秋広・田中敏彦・豊崎光一・宮林寛・守中高明訳、東京：河出書房新社、2010年)

Derrida, Jacques. 1967. *De la grammatologie*. Paris: Minuit. (『根源の彼方に——グラマトロジーについて』上下巻、足立和浩訳、東京：現代思潮社、1972年)

Guattari, Félix. 1977. *La révolution moléculaire*. Paris: Edition Recherches. (『精神と記号』杉村昌昭訳、東京：法政大学出版局、1996年)

——— 1979. *L'inconscient machinique. Essais de schizo-analyse*. Paris: Editions Recherches. (『機械状無意識——スキゾ分析』高岡幸一訳、東京：法政大学出版局、1990年)

——— 2011. *Lignes de fuite. Pour un autre monde de possibles*. La Tour-d'Aigues: L'aube. (『人はなぜ記号に従属するのか——新たな世界の可能性を求めて』杉村昌昭訳、東京：青土社、2014年)

——— 2004. *Écrits pour L'Anti-Œdipe, textes présentés et agencés par Stéphane Nadaud*. Fécamp: Lignes. (『アンチ・オイディプス草稿』國分功一郎・千葉雅也訳、東京：みすず書房、2010年)

Hjelmslev, Louis. 1966. *Le langage*, traduit par Michel Olsen. Paris: Minuit. (『言語学入門』下宮忠雄・家村睦夫訳、東京：紀伊国屋書店、1968年。本文中では、『言語』と表記)

——— 1968. *Prolégomènes à une théorie du langage*, traduit par Anne-Marie Leonard. Paris: Minuit. (『言語理論の確立をめぐる』、竹内考次訳、東京：岩波書店、1985年。本文中では『言語理論序説』と表記)

——— 1971 a. Stratification du langage, dans *Essais linguistiques*. Paris: Minuit.

——— 1971 b. Langue et parole, dans *Essais linguistiques*. Paris: Minuit.

Lecerclé, Jean-Jaques. 1990. *The Violence of Language*, London: Routledge. (『言葉の暴力——「よけいなもの」の言語学』岸正樹訳、東京：法政大学出版局、2008年)

江川 隆男 2014『アンチ・モラリア——〈器官なき身体〉の哲学』東京：河出書房新社。

小川 歩人 2017「非連続の筆致——『触覚』におけるデリダのドゥルーズ批判をめぐる」『Hyphen』2:39-47。

千葉 雅也 2017『動きすぎてはいけない——ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』東京：河出書房新社。